



3月に入り日の光が急に力強くなってきました。今年の冬は昨年より暖冬とは違って寒さがこのほか厳しかったせいか、日に日に増す光の暖かさが、気持ちを明るくしてくれます。やはり、季節というものを強く感じるのはこの時季でしょう。

ところで、私たちを取り巻く経済環境はというと、企業部門と輸出部門主導によって長期トレンドにあった日本の景気回復も、この春の訪れと共にピークアウトしそうな気配です。金融先進国で発生した所謂サブプライム問題に端を発した金融収縮と米国の景気減速が、これまで輸出に依存し過ぎていた日本経済に影響を与え始めました。また他方において、ドルを支えていた過剰流動性がドルから商品（資源）へと流れ、ドル下落と商品の実需以上の価格上昇を招いています。BRICsの目覚ましい成長が一方にはあるものの、同時成長を続けてきた世界経済に、大きな調整のバイアスがかかっているように思います。ハイテク金融？に踊らされた派手な饗宴に市場自らの自浄作用が始まったのでしょうか。不透明感が一層に増えています。

洞爺湖サミットに思うこと

昨年の今月号に、フロンや二酸化炭素の問題で、地球規模での自然環境の変化が日常レベルにおいても感じられるようになってきたことについて書きました。日常レベルでの現象が頻発することは、既に崩壊のためのプログラムができ上がってしまっており、事態は危険水域にすら入っているのではないのかと。それにも関わらず、個人や企業や国家や地域において、課題認識に大きな温度差があるということ。

さて、今年は、洞爺湖サミット。地球環境問題がテーマとして取り上げられ、議長国として日本もイニシアチブをとるために、積極的に動いているように見えます。それはそれで結構なのですが、ただ、市民レベルへの訴えかけでの盛り上がり、何か欠けているようにも思えるのです。もっと、メディア等を使って環境に対する意識を高揚させるとか、具体的行動を市民

に訴えるとか、市民を巻き込み、行動に変化を与えるような、強いインパクトや大きなうねりを起こさせるような、何か欲しいと思うのです。

今、進行している地球環境の問題は、人類がつくりだした、人類の生存維持に関わる深刻な問題です。本来なら我々人間が当り前と思ってきた価値観や行動パターンを根底から変える覚悟が必要であるはずで、その意味では文明史的考察も必要でしょう。現在の文明を支えた価値観や行動パターンに大きな修正を加える新たな何か（エネルギー）が必要です。

環境サミットに思うこと・・・それは、制度的枠組の構築も必要ですが、新たな哲学的理念に基づいた人類を動かす強いメッセージです。

（しかし、前段で書きましたように、世界経済が大きな変調を来している今、地球環境の問題には熱が入らないかもしれません）

新たなヨーロッパの胎動

先日、といっても今年1月の話ですが、NHKの「加ズアップ 現代」で「ヨーロッパからの新しい風」と題して、力を持ち始めたヨーロッパの新たな動きを数回にわたって特集していました。その中で特に興味深かったのが「カーボンネジメント」と「低炭素都市」への取り組みの話でした。

前者は企業活動に関わることで、企業は二酸化炭素の排出量を管理する「カーボンネジメント」がしっかりできなければ、株主や投資家の信頼を失いかねないとして、厳しい排出量管理に乗り出している話です。ここで見て取れるのは、企業行動そのものではなく、企業にその行動を促す株主や投資家の環境認識であり、また、その先に見える企業を取り巻く市民社会の環境に対する厳しい視線です。このような土壌があるからこそ、環境に対する市民レベルの動きと制度的枠組みがうまくかみ合って環境対策が進んでいくのだと思いました。

後者については、ロンドン市の話です。同市は二酸化炭素の排出量を1990年比で60%削減する目標を発表し、行政の強いイニシアチブで低炭素都市づくりを目指していることです。市内への乗り入れを規制する「渋滞税」や市民に省エネを指導する「緑のコンセルジュ制度」の導入等々、東京をイメージしながらこの話を聞いていると、この挑戦的な取り組みに驚かされますが、またそれを積極的に受け入れ、支持しているロンドン市民の環境意識の高さにも驚かされました。

近代ヨーロッパ文明は、ある時期より後発のアメリカ文明に覇権をとられてしまいましたが、地球環境という考え（価値観）をベースに、新たな持続可能な文明を再構築し出しているかのようにも感じました。

新たな文明の風は、いつも西から吹いてくるのかと、日本人の私には、ちょっと寂しい気がしました。